

審査の結果の要旨

氏名 横関 隆登

まちづくりや地域づくりの一環として、その地域に生活する人々で共有できる地域固有の風景を明確にして地域づくりの目標像とする風景計画の実践的試みが数多くみられる。しかし、風景という個人体験を公共性のなかに位置づけ、地域の人々で共有することは容易ではなく、住民参加型の集会等でもつれることが少なくない。風景計画学における風景の集団表象論では、これまで多様な地域においてそれぞれに共有され得る風景について議論を留保してきた傾向があり、地域で共有され得る風景に関する検討が求められているが、昭和戦前期には「郷土風景」を取り上げた一定の議論があったことが知られている。

そこで本研究では、近代の郷土風景論を対象に、風景の集団表象論の観点からその風景計画論としての特質を明らかにし、その展開可能性と現代的意義を考察することを目的としている。具体的に解明する研究課題は以下の三点で、一点目は、近代における「郷土」という概念の特質を明らかにすることである。二点目は、近代における「郷土風景」という概念の特質を明らかにすることである。三点目は、これらの概念の上に議論された郷土風景論について風景の集団表象論の観点からその計画論的特質を明らかにすることである。

第一章では、問題の所在および研究の目的、研究の方法として研究の対象と構成および分析の着眼点を示している。研究の方法としては、明治期以降昭和戦前期までの「郷土」および「郷土風景」の語誌的調査を踏まえ、郷土風景論の歴史的展開を整理し、その風景計画論としての特質を分析するとしている。分析方法としては、集団表象論に基づいて風景を捉えるモデルを設定し、郷土風景論で議論された風景概念をこのモデル上に位置づけ、各要素がどのような特徴を持つかに着目してその計画論的な特質を検討するとしている。

第二章では、「郷土」という言葉と関連語を含めた語誌の概要とその意味を分析整理している。その結果、「郷土」とその類義語は、多くが近世までに初出が確認され、「郷土」を冠した合成語は、出自の確かな範囲ではすべてが近代以降の初出であることを確認している。さらに「郷土」の意味は、出生地や「田舎」の意味が中心であり、合成語としては明治期に「郷土地理」が登場し、大正期には「郷土史」、「郷土歴史」が加わり一定の普及が認められ、昭和戦前期にはこれらの表現は「郷土教育」に置き換えられ、「郷土芸術」や「郷土色」など、表象の対象として位置づけられる傾向を指摘している。

第三章では、「郷土風景」という言葉および郷土風景論を対象に、「郷土風景」の語誌お

よび意味の把握と、近代造園学を中心とした郷土風景論の分析と考察を行っている。デジタルアーカイブを含む 59 種の資料を対象に、「郷土風景」の意味の読み取りを行った結果、「郷土風景」は、明治期に出生地の風景および地方の風景の意味として初出が確認され、大正期には国家的な風景の意味が加わり、昭和戦前期にはこれらの意味が定着し、述語として「郷土風景」が概念化して郷土風景論が登場した点を明らかにしている。

近代造園学における郷土風景論の分析は、最も多く郷土風景に関する著述のある田村剛の言説を中心に行い、田村が大正期に郷土風景を論じ始め、その概念を文化財と並ぶ環境の概念として示し、昭和戦前期には人間と体験と環境からなる現象として構造的に理解する言説を展開させていたことを明らかにしている。

そして、計画論としての特質を検討した結果、「人間」「体験」「環境」の関係性からなる風景モデルを基本としながら、「人間」を個人から様々な規模の社会集団として、「環境」を村落から様々な規模の地理的空間として、それぞれスケールの階層性を伴った秩序とともに認識していたことを明らかにしている。さらに「郷土」は、階層性のなかで出生地および生活場所に従って外部との関係が相対的に変化する点を指摘している。

第四章では、研究の考察と今後の展望を記述している。第二章、三章の成果をとりまとめたうえで、昭和戦前期の郷土風景論に見られる主体および環境に対する階層性と相対性への配慮が、現代の計画論にも求められ、実際の地域づくりにおける留意点や検討課題として検討を進める必要があると考察している。

以上、本論文は明治期から昭和戦前期における「郷土」および「郷土風景」の展開について語誌分析を通して整理するとともに、当時の郷土風景論の特質を明らかにして現代的意義を考察したものである。そして近世までに初出した「郷土」が、近代において徐々に教育や表象の対象となる中で「郷土風景」が初出、定着していき郷土風景論が登場すること、そして当時の郷土風景論が人間、環境ともに階層性と相対性を有していたことを明らかにし、今後の計画論でもこの点に関する配慮と技術的検討が必要であることを考察したものである。これらの研究成果は、学術上応用上寄与するところが少なくない。よって、審査委員一同は本論文が博士（農学）の学位論文として価値あるものと認めた。